

戦後思想史において『思想の科学』 とは何であったのか

土 倉 莞 爾

目 次

- I はじめに
- II 『思想の科学』の創刊
- III 『思想の科学』の50年
- IV おわりに
- 参考文献

I はじめに

『思想の科学』が終刊になってから久しい。筆者にとっては、青春時代の懐かしい思想雑誌であった。メディアの変容が深刻になって来ている昨今の状況のなかで、鶴見俊輔をはじめとして多くの知識人たちが、どのように「戦後思想史」に関わってきたのか、筆者なりに追跡してみたのが、以下の内容である。

II 『思想の科学』の創刊

鶴見俊輔は、「『思想の科学』の創刊」について、上野千鶴子、小熊英二との鼎談（鶴見・上野・小熊，2004）で、次のように語る。

小熊 1946年5月に、『思想の科学』を創刊なさいますね。その経緯をお話いただけますか。

鶴見 『思想の科学』の同人は、いまの大学教授の思想史研究者やなんかがあると、創立時のメンバー7人のうち4人がアメリカ留学生だったから、アメリカの思想を輸入しようとしたグループだと思うでしょう。でも違うんですよ。創立のときのメンバーは、私と和子、都留重人、武田清子がアメリカ

留学帰り。あと渡辺慧がフランス留学ですね。留学組でないのは、丸山眞男と武谷三男です。そして『思想の科学』の方針になった多元主義は、武谷三男から出たものなんです。

鶴見 編集会議を開いたときに、武谷の提案で内規を決めたんだよ。編集同人が7人いて、企画を持ち寄ったり、投稿を読んだりする。あの雑誌は、初めは32頁だったから、紙面の都合で載せられないからって却下する場合が出てくる。だけどいちど却下になった記事でも、同人のうち1人でも読み直してみても、これはやはりいいってことになったときは、けっして却下しないということを入規にしたんだ。これはもう、多元主義というか、ブルーリズムへの信頼だね。雑誌のカラーを統一しないという原則なんだから。(後略)。

鶴見 実をいうと、和子には違う考え方があったんだ。(中略)。和子が言うには、もう既に共産党が中心になって組織した民主主義科学者協会(民科)ができています。これに対して異論を立てるような誌面にするのは嫌だ、と言ったんですよ。

上野 和子さんがそういうことをおっしゃる時代だったんですね。

鶴見 そうしたら、武谷三男が、「共産党から独立した雑誌が1つあってもいいじゃないか」って言ったんだよ。これが通っちゃったんだ。

小熊 それを、戦前からの筋金入りのマルクス主義者である武谷さんが言うところがすごいですね。

鶴見 つまり彼は、共産党に引き回されないマルクス主義者。自由のあるマルクス主義者なんだ。黨員にもなっていなかった。この多元主義は、もとをたどれば、彼が戦前に反ファシズムの雑誌『世界文化』のグループに参加していた経験からなんです。1935年に『世界文化』が京都にできたときには、もう日本共産党の主だった幹部は獄中にいて、党は壊滅していたんです。だからこの雑誌は、共産党に従う者だけでなく、多様な人びとの連合としてつくられていたんです。(中略) そのあと『世界文化』は、1937年には同人の一斉検挙でつぶれてしまう。しかしわずか2年半のなかで、中井正一の「委員会の論理」とか、既存のマルクス主義からでは出てこないような、い

戦後思想史において『思想の科学』とは何であったのか

ろんな重大な論文を出しているんです。そしてそのグループにいた武谷とか
新村猛、和田洋一、久野収とかが、戦後に『思想の科学』に関わってくる。
つまりそういう戦時期の日本ではぐくまれた思想が、『思想の科学』につな
がったんですよ。

鶴見 それが『思想の科学』での武谷の提案になって現れたんですよ。ところ
が普通、大学に所属している思想史研究者は、そういうことを見ないで、同
人の7人のうち4人がアメリカ留学生だから、アメリカの思想に影響されて
多元主義になったんだろうとか考えるんです。だけどそうじゃないんですよ。
武谷三男という個人が、頑強に主張したから『思想の科学』の多元性が生ま
れたんです。誰かが自分の責任で、言うべきことを言ったということを見な
くて、いったい思想史なんてものにどれほどの値打ちがあるんですか。私は、
武谷さんがあんなことを言う人だとは、それまで思っていなかったんです。
『思想の科学』は、武谷さんによって助けられたんですよ。

小熊 戦時期の経験を、よいかたちで引き継いだことから始まったんですね。
獄中非転向の共産党幹部たちは、1930年代初めまでに獄に入ってしまったて、
戦時期の経験がなかった。だから人民戦線的な連携に目が向かわないで、そ
れ以前の社会民主主義主要打撃論で戦後を始めてしまったということは、い
ろいろな人が指摘しています。

鶴見 だから『思想の科学』は『思想の科学』から始まったんじゃないんです。
民科の創立メンバーのなかから、武谷三男、渡辺慧、宮城音弥の3人が、
『思想の科学』のほうに来て、個人としてはもう民科に出席しなくなった。
当時、同じビルの下のほうに民科の部屋があったんだけど、みんな7階まで
上がってきて『思想の科学』まで来て会合をやっていたんだ。そして共産党
から『思想の科学』を防衛してくれた人は、この3人なんだ（笑）。当時の
同人で、宮城は戦前はマルクス主義者で、当時の学生のなかでも最左翼だっ
ただけど、フランスに給費生で留学に行ったら、フランスのマルクス主
義ってのは全然違うって言うことを実感して、日本の共産党に批判的になっ
た。だから戦後は、日本共産党の路線に同調しない。武谷さんもそうだけど、

そういう人たちが自分の経験を、『思想の科学』に持ち寄ってくれたってことだね。

小熊 私もいろいろ調べていて、たとえばベ平連もベ平連から始まったのじゃなくて、その前のサークル運動の流れとか吉川勇一さんの共産党の内紛時代の経験とか、いろんなものが流れ込んで存在したんだと思いました。

鶴見 地理と同じじゃないの。いくつもの源流があってこそ、流れができるんですよ（鶴見・上野・小熊 2004, 158-62）。

短くコメントさせてもらえば、『思想の科学』の源流がよくわかる気がする。ポイントは、鶴見の言う「多元主義」である。今でこそ、平凡な概念であると言ってもよいかもしれないが、「民科」との対抗ということは重要なスタイルだったと思われる。その意味では、源流の1つが『世界文化』であったことも貴重なエピソードであったことも銘記しておくべきことであろう。

さて、『思想の科学』はどのように自己形成され、出発していったのであろうか？小熊の質問はまだまだ続く。

小熊 鶴見さんの『期待と回想』（下）（鶴見, 1997）によると、『思想の科学』の同人は当初、和子さんが集められたそうですね。

鶴見 そう。和子は子どものときから、私を非常な弱者と思い込んで、助けてくれていたんです。私がおふくろに殴られたり、女性との関係が複雑になったりしたときに、彼女が助ける役だったんですよ。そして私が結核になって、南方に行って、とにかく生き残って帰ってきた。でも戦後に私が落ちこんでいるんで、親父に「俊輔に雑誌を出させてあげて」と彼女が頼んだんですよ。

鶴見 ちょうど、親父が戦中からやっていた太平洋協会の出版部があった。これは海軍と結託して出版物を出していたんですが、敗戦後は海軍はなくなるし、親父も追放になるし、これまでのように本を出していけない。だけど出版社としての機構だけはあるわけですよ。『思想の科学』は、当初はその機構に乗っかるかたちでスタートしたんです。だけど私は15歳のときにアメリカに行って、それから南方にいたりしたわけですから、日本のなかに知合い

戦後思想史において『思想の科学』とは何であったのか

があまりいない。それで同人を集めるのは、全部和子が話をつけたんです。最初の7人のなかで、私の方が古くから知っているのは、15歳からのつき合いの都留重人だけなんですよ。

小熊 でも和子さんもまだお若いんですよね。アメリカ留学組と知合いだったのはわかるとして、どうやってほかのメンバーの方々を知っていたんですか。

鶴見 彼女は女性だったから、戦争中に交換船で帰ってきても、兵隊にとられなかったんですよ。それで彼女は1942年8月からずっと東京にいた。そして、親父が太平洋協会のアメリカ分室というのをつくって、敵国アメリカの研究の本をいくら出していたので、そこで働くことになったんです。(中略) 彼女はそこで働きながら、いろいろな研究室に出入りしたり聴講したりしていた。それで戦中に、武谷さんや丸山さんを訪ねていたんです。

小熊 つまり、和子さんは戦中から編集者として人脈をつくっていたわけですね。

鶴見 それで彼女は、丸山さんのところから、彼が1941年に書いた「近世日本政治思想における『自然』と『作為』」という論文が載っている『国家学会雑誌』を持ってきて、私に見せてくれたんだ。私がジャワから帰ってきたあとの、1945年でした。

小熊 丸山さんの実質的なデビュー作ですね。あれを戦中から読まれていたわけですか。

鶴見 そう。あの論文は、荻生徂徠を始めとした儒学を論じたものです。そこでの丸山さんの主張というのは、政治的な秩序は自然の流れとかいうものではなくて、人間の主体的な行為によって生まれる作為、一種のフィクションだという考え方が西洋近代思想にはあるけれど、そういう考え方が江戸儒学でも発生したということですね。これはもう戦争中の皇国思想、つまり日本の自然のなかに天皇を中心とした道徳が埋め込まれていて、それが国民規範であるという考え方とは、まったく異質なんですよ。それを読んで、私はたいへん驚いた。これはまさに、スピノザが言った「作る自然」と「作られた自然」の問題なんだ。つまり1905年以前の「作る知識人」と「作られた知

識人」のちがいという問題でもあるんだよ。

小熊 そういう丸山さんの意図を、正確に読み取れた読者は、同時代には必ずしも多くはなかったと思いますね。

鶴見 そうかもしれない。でも和子もその丸山さんの意図がわかったから、その論文を私のところに持ってきた。それから彼女は、武谷さんがティコ・ブラーエについて書いた論文も持ってきた。文理大学の紀要に載ったもので、3段階論を彼が最初に唱えた論文ですね。これもすばらしいと思った。

小熊 では、これもやはり戦中の蓄積があって、『思想の科学』ができたということですね。和子さんが編集者として、いろんなところに人脈をつくったり、論文を読んだりしていたことが戦後につながったと。

鶴見 そう。戦争中のつながりなんです。あと渡辺慧は、やっぱり戦争中に、キュリー夫人が書いた『ピエール・キュリー伝』の翻訳を出していて、あれもたいへんおもしろい本だったんですよ。彼はもう、戦争が大きらいなコスモポリタンなんだよね（同、162-5）。

鶴見 それで最初の編集会で顔を合わせたあと、雑誌の題名を決めようということでも議論したんです。ところがそれが難航した。だいたいみんな専門がちがうから、話が合わないんだよね。あとで丸山さんの門下の橋川文三に聞いたところによると、丸山さんは、最初の編集会ではじめて私に会ったときには、私が何を言っているのかさっぱりわからない、と思ったそうなんですよ。

鶴見 だけど丸山さんは、私の話がわからなかったあと、ちゃんと東大の図書館を一所懸命探して、ミードが書いたアメリカ思想史の本を見つけて、私の話のコンテキストを理解しようとしたんだそうですよ。これも橋川から聞いたんだけどね。（後略）。

小熊 だけど丸山さんの思想とプラグマティズムの認識論は、全然合わない感じがしますが。

鶴見 そうなんだけど、丸山さんは福沢諭吉から類推したようなんですよ。つまり政治とか行為というものを結果から評価する、意図からだけでは見ないという考え方ですね。これにはプラグマティズムに通ずるものはあるわけで

す。ですから丸山さんの福沢諭吉についての連作は、ちょうど荻生徂徠にフィクションの思想を見るのと同じように、福沢のなかにあるプラグマティズムを見ている。だから丸山さんがプラグマティズムを勉強したとはいっても、アメリカから輸入した思想を教科書的、優等生的に理解しましたというのではない(167-8)。

ここで、筆者も少しだけコメントしてみたい。第1に、「丸山さんの思想とプラグマティズムの認識論は、全然合わない」という小熊の発言には語弊があるかもしれない。プラグマティズムを、どこまで広げて、どのように捉えるかよっての相違であるかもしれないが、丸山の政治学は戦前においてもドイツ観念論とマルクス主義だけだったかという、そうでもないと思われる。丸山には、トクヴィルのな貴族自由主義や、エドモンド・バークのような経験主義的保守主義が入っており、それは戦後になってからではないのではなかろうか。これらは、政治学的プラグマティズムといってよいものであり、福沢諭吉だけから得たものではない、と考えるからである。付言すれば、例えば、清水幾太郎は、戦前からプラグマティズムに馴染んでいたはずである。ただし、丸山は戦前には清水の著作を手にしていなかったかもしれない。

第2に、大胆に言えば、『思想の科学』の起点のひとつは、丸山が1941年に書いた「近世日本政治思想における『自然』と『作為』」という論文をあげることができる、と言えるのではないか。その意味で、時代を画する論文というのはあるのだというのが、筆者(土倉)の想像である。その延長線上で考えて、「丸山さんの意図を、正確に読み取れた読者は、同時代には必ずしも多くはなかったと思います」という小熊発言は、やや軽率ではないか。丸山は、政治学の基本に立って執筆したのだと思うが、それを可能にしたミリュウは、たとえ戦時でもあったと思うし、丸山の言わんとすることを理解できた読者は少なくはなかったと思う。さて、「難航した雑誌の題名を決めようとした議論」の問題に話を戻したい。

上野 雑誌の題名が決まらなかったというのは？

鶴見 いろんな案が出てね。武谷三男は『科学評論』という題名がいいといった。いまになって武谷さんの全体の仕事をみると、彼がこの題名にこめた意図はよくわかる。(中略) だけど1946年の最初の編集会では、そうは思わなかった。それでその武谷さんの提案は、1票しか取れない。そして丸山さんは、『思想史雑誌』がいいと言ったんですよ。

鶴見 丸山さんの主張はこうなんです。たとえばルソーのいう「自然人」というのは、いったいどういうコンテキストから出てきたか、それを実証的に探索する。観念の単位がどこで発生したかを、きちんと調べていく。たとえばその後、加藤周一さんと、翻訳語の探求とかをやっていますね。ああいう作業を通じて、日本の思想的基礎をつくりたいということだったんだけれども、これも1票しか取れない(笑)。

上野 鶴見さんご自身はどういう題名を提案なさったんですか。

鶴見 私は『記号論雑誌』という題名を出した。『思想の科学』に最初に私が書いた論文は、「言葉のお守りの使用法について」だったんだけど、これは記号論の応用だった。

小熊 戦争中の「皇国日本」のスローガンやら、戦後の「民主主義」のスローガンやらが、次々に乗りかえられて「お守りの」に使用される状況を、記号論を応用して批判したものですな。

鶴見 そう。そういうことを考えて『記号論雑誌』と提案したんだけど、丸山さんをはじめ、記号論という考え方がわからないんだよ。それで説明したんだけど、さっきも言ったように、何を言っているんだかさっぱりわからないという反応でね。それで、これも1票なんだよ(笑)。

小熊 和子さんはどんな題名を言ったんですか。

鶴見 和子はなにも題名を出さなかった。和子としては、民科が正当(ママ)であって、この雑誌は弟のためだと思っているんだから。その編集会には、理由は忘れたけれど渡辺慧が来なかった。都留重人は経済科学局にいたから、多忙で来られなかった。だから4人の会合で、意見がバラバラ。

上野 その状態から、どうやって意見がまとまったんですか。

鶴見 それでまったく頓挫してしまった。会議の場所は日比谷の市政会館の6階だったんだけど、そこに出入りをしている人のなかに、偶然に上田辰之助がいたんですよ。上田辰之助は戦争中は干されていたけれど、ものすごく英語ができる人なんです。博士論文がトマス・アクィナスの経済思想で、中世経済に関心をもっていて、彼自身もクウェーカーです。それで上田さんが偶然にその場にやってきて、1つの案を出した。カトリック神学のなかに、ある種の科学思想が胚胎していますが、彼はおそらくそこから『思想の科学』という題名を考えたんです。彼はその場でこう言ったんです。「art of thinking」という言葉がある。そこからちょっとずらして、science of thinking」という言葉が考えられる。こういうのが、あなたたちがつくろうとしている雑誌じゃないか」ってね。その題名が人気があって、それを名前にしちゃったんです（168-71）。

Ⅲ 『思想の科学』の50年

さて、今から見れば、ユーモラスな、極めてドタバタとした思想雑誌として出発した『思想の科学』は、50年間の変遷を続けながら、刊行を継続した。どのように変貌したのか、50年間の『思想の科学』とは、いったい何であったのか、考えてみたい。話の切り口は、前節と同じく、鶴見・上野・小熊の「鼎談」をベースにしてスタートする。

小熊 1946年に『思想の科学』を出して、当初の反響はかなり上々だったわけですね。

鶴見 そう。私も戦中に考えた「言葉のお守り的使用法について」を書いたり、和子もプラグマティズムの批判をしたり、いろいろ書きたいことが多かった。若槻礼次郎にインタビューに行ったのもそのころです。あれは「私の哲学」というインタビュー連載企画の一つで、若槻さんのほかにもいろいろ有名な人に話を聞きに行った。もともとは『思想の科学』を売りたいという発想から出てきたもので、あとで単行本になったりするんだけど、若槻さんには人間の大きさを感じたな。あれこそ、日露戦争以前の明治の知識人、自分をつ

くる知識人だった。

彼は捨て子で小学校しか出ていない。小学校を出るとすぐ校長にされた。学校が終わってから川で魚を取ったりしていると、周りの人が「あんなに優秀なんだから、東京に送り出してやろうじゃないか」と言ってお金を出してくれた。そして図書館に通って自習して大学に入って、首相まで行くんた。

私が訪ねて行ってもまったく威張りもしないし、見えも張らない。夏だったんだけど、裸同然みたいな恰好で出てきて、「両親の顔も知りません」とか平気で言うんだからね。それまで私が知っていた日本の知識人とか政治家とかとは、まったく違う日本人がいると思った。インタビューしたあと、「談話の整理とかは、全部おまかせします」と言ってくれてね。

小熊 敗戦直後の時期は、みんな新鮮な言論に飢えていて、新規創刊の雑誌はよく売れたようですね。

鶴見 『思想の科学』も、創刊号は1万部出して売り切れました。ところがそのあとだんだん部数が落ちて、それを越えたのは、それから15年経った1961年の天皇制特集号を出したときです。あのときは1万7千部行きました。その1万7千部を超えたことは、『思想の科学』50年の歴史のなかではありません。あのときは、当時の発売元の中央公論社が鳴中事件で慎重になって、天皇制特集の原稿がもう集まっていたのに、出さないと言ってきたんだよ。それで編集部でなかで、どうしようかという相談になって、私は「ガリ版で出せばいいじゃないですか」と言った。だけど、『朝日新聞』の論壇時評で都留重人さんが言論弾圧に妥協するなっていう批判をしてね。それで、『思想の科学』として新しく会社をつくって、出すということになった。それで自分たちでも、資金の都合はつけたんだけど、全く別に勁草書房の社長だった井村寿二が、社業と別に個人として100万円を貸してくれた。(中略) 貸してくれた方は、お金は帰ってこないだろうと思ったんだろうけれども、天皇制特集号を出したら売れて、けっこう余剰金が出て、2年間のうちに100万円を全部返した。(中略) あれが売行きのピークだね。そのあとは、加太こうじと、上野博正がお金を注ぎ込んでくれて、50年続いた。私も半分くらいは

戦後思想史において『思想の科学』とは何であったのか

出したんだけど、ベ平連と『思想の科学』の両方を背負ったときは苦しかった。

鶴見 加太さんは、最後まで、まったくのマルクス主義者だったんですよ。彼は、日曜版の『赤旗』をつくっていた人なんだ。それがなぜ、『赤旗』じゃなくの方に入れ上げたかという、彼は小卒なんだ。彼が共産党の本部に行って、たとえば教育政策について意見を述べると、幹部なんかが「ああそうですね、加太さん」とか言うだけなんだって。ところが、加太さんが『思想の科学』の方に来て、たとえば森毅と座談会をすると、森はちゃんと真面目に応えてくれる。その感触が全然違うから、加太さんは自分の稼ぎから、驚くべき金を『思想の科学』の出版に費やしてくれたんですよ。

まあ私は、共産党の存在は認めていますよ。だけど共産党というのは、やっぱり東大出が偉いところだよ。私がいまの共産党に言いたいことは、思うようなかたちで政治に関心を持ってくれない庶民を叱るなということ、それだけだ。とにかく加太さんと上野博正のおかげで、1996年に休刊するまで『思想の科学』は続いたわけ（鶴見・上野・小熊 2004, 206-9）。

小熊 初期の『思想の科学』は、アメリカ哲学の紹介をはじめとした啓蒙的な路線をとっていたわけですが、1950年代に入るところから、各地に読書会のサークルを組織して、そのサークルから現場報告を募ったり、ライターをリクルートするという方法に変わっていきますよね。

鶴見 売行きが落ちてきたころ、1950年ぐらいだったかな。私はもう京大に勤めていて、東京から夜行で京大に通っていたんだ。それである夜中に熱海を通ったとき、熱海に岩波書店の別荘があって、その日はそこに丸山眞男さんが泊っていることに気づいた。「ああ、ここで降りれば丸山さんがいるなあ」と思って、降りて訪ねて行ったんだよね。（中略）彼が言うには、「支部をたくさんつくって、その支部1つ1つから、ライターを求めて、やっていけばいいじゃないか」と言ってくれたんだよ。（中略）だから『思想の科学』に支部をつくれと言ったのは、丸山さんが初めてなんだよ（同、206-10）。

鶴見 私は丸山さんみたいな意味での啓蒙家ではない。啓蒙というのを、上か

ら教えられて導かれましたという意味で使うなら、ちがうと思う。ただ、私なんかの意図から外れて、突発的にばーっと喚起されてしまったというような効果は認める。

上野 なるほど、意図せざる効果だと（笑）。

鶴見 やっぱり突発的に起これば、啓蒙もたいへんいいことじゃないの（笑）。

たとえば、私が『振袖狂女』という映画の批評を『映画評論』に書いた。それを新潟で21歳の電気溶接工をやっていた佐藤忠男が読んで触発されて、『思想の科学』に投稿してきたんだ。その投稿を1字も削らず、1字も足さず、私が掲載した。それが映画評論家としての彼のデビューだ。（中略）「啓蒙しよう」と思っていたんじゃない。

小熊 「啓蒙」は enlightenment, つまり「火をつける」ということですから、元来の意味はそういうものじゃないですか（211-2）。

閑話休題。本稿の執筆の最中で佐藤忠男の訃報を日刊紙で目にするようになった。筆者（土倉）はそれほど多く映画を見たわけではないが、佐藤忠男の「映画評」には多く教えられた方である。筆者の記憶のためにその訃報を少しでもここに引用することをお許しいただきたい。それは次のようになっている。

映画評論家として映画界の発展に寄与し、日本映画大学などを歴任した佐藤忠男さんが3月17日午後6時40分、胆のうがんのため死去した。91歳だった。告別式は近親者で行った。1930年、新潟県生まれ。1950年代から評論活動に入り、独自に映画資料の発掘や研究に取り組んだ。活動範囲は映画だけにとどまらず、大衆芸能や演劇など幅広い分野に及んだ。おもな著書に『黒沢明の世界』（佐藤、1986）、『小津安二郎の芸術』（佐藤、1978、79）など（『日本経済新聞』、2022年3月22日）。

上野 少数精鋭の同人で始まった『思想の科学』が、一般からの投稿を受け入れるようになったのは、どういう経緯からなんですか。

鶴見 それは、もともと私の発想じゃなかった。大野力という、群馬県の共産党の地区委員をやった人物が、共産党を除名されたところから、『思想の科学』

戦後思想史において『思想の科学』とは何であったのか

の同人に入ってきた。そして、彼の知り合いで同人に入りたい人がいたんだけど、その当時は同人2名の推薦がなければ入れない。それを取り払っちゃって、誰でも入れるようにしようということを彼が言ったんだ。そこから、同人以外の寄稿を受けつけることも起こった。

その結果いろんな人が入ってきたんだけど、当時の実務をやっていた市井三郎がものすごい打撃を受けちゃってね。つまり、近くの同人がやって来て、市井三郎の勉強の時間を奪うわけ。彼は阪大の理学部で化学の出身なんだよね。そして哲学は素人だったので、一所懸命に哲学史を勉強した。(中略) ラッセルの『西洋哲学史』(ラッセル, 1959) というのは、彼が全部自分ひとりで訳したんだから、たいへんな勉強家なんだよ。それで、記号論理学も勉強したいと考えているときに、いろんな人間にわっと入ってこられて、いろんなことを言われてたいへんに困った。それで彼は私に、大衆化はやめようという意見を強く述べる葉書をくれた(212-3)。

鶴見は、小熊、上野との鼎談において、市井のことには、それ以上言及していないが、他の著書(鶴見, 1997)で触れている。大事な箇所なので、ここで紹介させていただきたい。鶴見の回想は『思想の科学』の設立初期から始まる。

鶴見さんご自身は、どのような構想を持っていたのですか

構想というか、ヴィジョンはささやかなものです。戦争中に横行した論壇の哲学があまりに浮き上がっていたでしょ。だから、はっきりと根拠というスタイルをつくっていかう。そのことに尽きますね。そこからはじめて雑誌を編集し、雑誌を出していくうちに、状況との取り組み方からルールが出てきたんです。プラグマティズムの考え方なんですけどね。

私はいま「ルール・オヴ・サム」という言葉が大好きなんです。ルールというのは尺度。サムは親指。自分の親指の尺度ということですね。(中略)『思想の科学』をやってきた50年で、いろんなことがあったから、それぞれ

のときに「ルール・オヴ・サム」が出てきた。この「ルール・オヴ・サム」はイギリスの日常語としてあるんです。市井三郎がイギリス留学から帰ってきたときに、しきりに使っていました。(中略) たしかに50年後の『思想の科学』は、最初の1年、いまでもある市政会館の時計台の下の部屋に集まってやった会議にくらべて、理論のレヴェルは低いんです。1946年に渡辺慧、武谷三男、丸山眞男、宮城音弥、都留重人、南博がもっていたレヴェルから見ると……。 (鶴見1997, 200-1)。

『思想の科学』を創刊して、最初の手応えはどんなものでしたか。

創刊号は32頁でしたが、浦和にあった印刷所に原稿を持っていき、校正して、できあがった雑誌を百冊持って、新橋駅のプラットホームの売店に置いてもらった。それからまた百冊持って有楽町駅に行ったんです。

ある日の夕方、市政会館の時計台の下の部屋で一人で座っていると、いつのまにか暗くなってきた。そこに、フワーと人が入ってきて、「この雑誌の感想を書いたんだけど、住所を見ると近くだったので、ここまで歩いてきた」。そういう。市井三郎なんですよ。はじめて会ったんです。

市井さんは、いまは、占領軍の海軍病院に通訳として勤めている。阪大理工学部化学科を出て、もう細君をもらい子どももいる。敗戦のとき、マルクス主義と近代の科学理論とをあわせ、新しい立場の学問をつくらなければならないという考えに燃えたけど、哲学科出身じゃないので自前の学問をやらなきゃいけない。そう話したのです。『思想の科学』を訪ねてくるきっかけは、私（鶴見）が有楽町駅に置いた100冊のうちの1冊を買って読んだからです。その感想を書いてきた。市井三郎が8番目のライターになったんです。これは『思想の科学』という雑誌にとっての「ルール・オヴ・サム」になった。読者がライターになるというやり方です (同, 202-3)

以上のようにして、市井と『思想の科学』の関わりについて長々と市井について記したが、筆者（土倉）は、『思想の科学』における市井の存在の重

さに注目しているからであるが、前述の鶴見・上野・小熊の「鼎談」に話を戻したい。

鶴見 彼（市井）は私に、大衆化はやめようという意見を強く述べる葉書をくれた。

上野 じゃあ、内部でも路線の対立があったわけですね。

鶴見 そうだけど、結局は、なんとなくその大衆化の方向に行った。そうしないと雑誌も売れなかったしね（笑）。

上野 そうすると鶴見さんは、どちらの側に立たれたんですか。

鶴見 もう大衆化したんだから、やってしまえ、という方向だね。つまり初めての7人の顔ぶれは、丸山眞男・都留重人・渡辺慧・武谷三男・武田清子に和子と私、これはレベルの高い同人会議だった。

鶴見 だけど、それではやっていけなかった。とはいえ、大衆化する以外の選択の機会もあったんだ。というのも、最初の同人には英語を話せる人間のパーセンテージが高かったということもあって、ロックフェラー財団が補助してくれた。

鶴見 くれるって意向が、向こうから来たんですよ。

上野 えーっ！

鶴見 やっぱり、それだけの集団だと認められていたわけですね。ところが、1950年ごろに、その補助の問題で総会が紛糾してね。その当時、井上清・奈良本辰也・林屋辰三郎といった共産党系の歴史家が、会にいた。彼らが、「アメリカ帝国主義の補助を受けるな」と主張したんだ。

小熊 逆コースや朝鮮戦争が始まって、共産党がアメリカと全面対決してゆく時期ですね。

鶴見 それで紛糾したあげく、補助を返上しようという結論になって、こっちから切ったんだよ。もうそうになると、これは雑誌を売ることによってベースをつくらなきゃならないでしょう。となれば、大衆化路線というのは、その帰結だったんだ。丸山さんが支部をつくれと言ったのも、ちょうどそのころです。

小熊 もうそのころは、丸山さんは平和問題談話会で全面講和问题にかかわって、ほとんど『思想の科学』の方には来ていないですね。

鶴見 そう。だから、私が夜中に熱海で降りて、岩波書店の別荘を訪ねていて相談した。

上野 つまり初期とは同人の顔ぶれも変わっていて、共産党系の人も入っていた。そして大衆化路線という、運動的な手法を共産党の関係者が持ち込んだということですか。

鶴見 結果的にはそうなりますね。もちろんさっきの大野力の提案にしても、個人としての意見です。だから団体として共産党の指導を受け入れた、とかいうわけじゃない。

上野 そうですか。大衆化というのは、鶴見さんの思想から意図的にやってこられたのかとばかり、私は思っていました。

鶴見 歴史というのは必然じゃなくて、偶然の要素が多いんだよ（笑）。だけど「アメリカ帝国主義と手を切れ」という声に対して、私はノーとは言わなかった。大衆化のなかから、別の道が開けるんじゃないかと思った。実際に、その結果として、突発的に佐藤忠男とか、上坂冬子が出てきたわけだから。

上野 私は、鶴見さんのそういう、学校エリートとは違う「庶民の知性」の発掘という姿勢は、鶴見さんの戦争体験から出てきたものであって、それが『思想の科学』の大衆化路線と結びついたと思っていたんですが。

鶴見 それは結果的に絡んだんだ。たしかに私が戦争体験から得たものは、知識人と知識人じゃないものとの境界線はない、大学を出ているとかは問題じゃない、という見方だった。だから私は、学歴のない人でもものを書ける人に肩入れする。それはずーっとやってきた。だけど、それと『思想の科学』の大衆化路線が結びついたのは、あくまで結果です。

小熊 大衆化路線に絡んでお伺いしたいのですが、1950年代の初めからは、共産党がなかば非合法化されて、サークル活動への浸透を重視していきますよね。それで、山村工作隊を兼ねて農村への聞き書き調査活動などが始まり、鶴見和子さんも石母田正などと一緒に、労働者のサークルで文集をつくる方

戦後思想史において『思想の科学』とは何であったのか

に入っていく。そして『思想の科学』の誌面でも、サークルで書かれたものを載せていたりしたわけですが、そのへんは同人でいらっしやった共産党の方々の影響というのはあったわけですか。

鶴見 「共産党の影響」というよりは、やっぱり個人的な影響ですね。当時の時代の雰囲気もあったでしょう。(中略) 私は、共産党は存在としては認めているし、個人的に仲のいい共産党員は多かった。(中略) だけど共産党員として、私を当時の党の方針にひっぱりこんで大衆路線に誘導した、とかじゃないんだ(笑)。困ったことといえば、現役の共産党員と、共産党から除名されたマルクス主義者たちとの闘争というのが、『思想の科学』の場で行なわれたことがしばしばあったことだね。これは困った。

小熊 ついでにおうかがいしてみたいのは、和子さんのように、労働者サークルの活動に入っていこうとかは、鶴見さん御自身は思われなかったんですか。

鶴見 和子のように一緒に作文をやるとかはしなかったけれど、サークルはずいぶん回った。当時は『思想の科学』の読者サークルはたくさんあって、そのなかで面白い人も出ている。たとえば社会学者の見田宗介(ペンネーム真木悠介)は、彼が20歳くらいのときサークルで出会った人なんだ。彼は1937年生まれだから、当時はまだ東大の学生だったと思うけれども、私は彼に会ったときに、「前にあなたの写真を見たことがあるね」って言ったんだ。そしたら「そうですか」と言うんだよ。その写真というのは、彼が小学生のときに、『アカハタ』をよく売る立派な小学生ということで記事が出ていたんだ(笑)。

小熊 見田さんのお父さんの影響でしょうか。

鶴見 彼はマルクス主義哲学者の甘粕石介の息子なんだ。「資本論もよくわかる小学生」とか記事には書いてあったな(笑)。彼は中学校まではマルクス主義者で、思想はそれだけが絶対だと思っていたのが、高校生になると疑問をもちだしたんだね。それでその後は、城戸浩太郎のやっているようなグループと接触して、マルクス主義を否定するわけじゃないけれども、少し違う方向に進むようになった。だけど彼は、それまでの付き合いのなかでは、

自由に自分の考えが発表できない。それで、『思想の科学』がやっていた戦後史研究会とか、「ユートピアの会」なんか顔を出すようになった。彼は偶然に高学歴で東大出だけれど、面白い秀才だと思うね。偶然に向こうからやってきた人なんだけれど、『思想の科学』の流れが、彼によって新しくなった部分がある。

小熊 見田さんがやった流行歌の研究とか、のちに彼の『気流の鳴る音』（真木、1977）に結実する宗教やカルロス・カスタネダへの関心とかは、もともと鶴見さんの著作や『思想の科学』に原型があったものだということは、私も最近調べてみてよくわかりました。

上野 身の上相談の研究もそうですね。見田さんの研究は、歴史に残る古典となりました。

上野 見田さんも当時は無名の若者だったと思いますが、そういう無名の若者や庶民の人たちとまめにサークルを歩いてつき合ってこられたんですね。相当の時間とエネルギーを使って。

鶴見 疲れたね。年がら年中、1日中回っていたわけよ。体力があったねえ。だけど疲れた（笑）（鶴見・上野・小熊 2004, 213-9）。

このあたりで、鶴見・上野・小熊の「3者鼎談」からの長々とした引用は終えたい。筆者（土倉）として簡単に小括すると、『思想の科学』の「50年代の葛藤」のポイントは、意識的なものではないが、『思想の科学』の目立たない戦略転換ではないかと思われる。

すなわち、それを約言すれば、鶴見の一言、〈『思想の科学』の流れが、見田宗介によって新しくなった部分がある〉に象徴されると思うものである。

言いかえれば、丸山が心に描いていた異分野交流の民間アカデミズムの形成から、「大衆化路線」への変容である。ただし、「大衆化」のイメージとデザインは、日本共産党、鶴見、高畠、市井、見田によってそれぞれ違った。鶴見の絶妙な表現を借用すれば、「リーダーによって違う」ということになるのか。

ここで、また、『期待と回想』（下巻）（鶴見、1997）の第10章「雑誌『思想

戦後思想史において『思想の科学』とは何であったのか
の科学』の終りとはじまり」における鶴見の発言に戻りたい。

『思想の科学』は、1959年1月号から61年12月号までを中央公論社から刊行し、62年の新年号の「天皇制特集」が廃棄処分にされたことで、自主刊行に踏み切る。自主刊行10周年の1970年から雑誌の雰囲気が大きく変わってきたと思います。状況を見据えるような原稿が多くなった。この変化は意図的なものだったんですか。

それはリーダーによるんです。当時は高畠通敏（政治学者）が編集の中心の時代でした。高畠さんはきわめつきの秀才なんです。ところが「転向研究会」に入って転向論に力を注ぎ、助手論文を書かず、東大を出ざるをえなくなった。丸山眞男さんはかれが正統の学問から離れることを心配していました。1970年ころに、高畠さんが立てた特集「学問の入門シリーズ」「管理社会」は、学界的な意味ではオリジナルなんです。「管理社会」という問題は、高畠さんが特集をつくってから広く使われるようになった。（中略）。その後は、加太こうじです。加太さんは戦前からの左翼なんです。戦後、『赤旗日曜版』をつくった1人なんですよ。

加太さんは、自分が共産党の本部に行き、なにをいっても「そうですね」といわれるだけだったと話していました。（中略）ところが『思想の科学』に来ると、どんな議論を出してもきちんとやる。そういつてました。加太さんは公式のマルクス主義者なんです。しかし『思想の科学』の編集・刊行に対して責任をもち、糖尿病で倒れるまで長くつづけました。1980年に発行人になり、たいへんな額の金銭を負担したんです。京都での編集会議にも自分でやってきた。

あるときから大学風じゃなくなるのですよ。つまり、加太さんがリーダーになるような会になったんです（同、208-10）。

そこにはベ平連の広がりがある影響しているんじゃないですか。

してる、してる。

……その前に、自主刊行なんですけど、このときの根回しは都留さんがやったんです。(中略)「どうするんだ」というから、私(鶴見)は「ガリ版でも出す」といった。都留さんは「ガリ版はいけない。あれは財産なんだから、私がちゃんとお金を出すように手配しているから、そこに行ってお金をつくって出しなさい」と。そこで井村寿二さん個人から百万円のお金を10人の名前で借り、自主刊行の資金にしたんです。それに、都留さんは井村さんから借りていた銀座の事務所を明け渡して、無料で「思想の科学」の事務室にしてくれた。根回ししたのは都留さん個人なんです。新聞で批判し、自主刊行の根回しをやったんです。この自主刊行の創立集会は、立教大学の高畠さんの研究室で開きました。(中略)社長は久野収さんで営業部長が市井さん、主任が高畠さん。市井さんの運転するオートバイの後ろに高畠さんが乗って紙屋からぐるぐるまわり、自主刊行に入った。その第1号、1962年3月の「天皇制特集号」が1万7千部売れたんです。(中略)その後、売れ行きが下がり、赤字になっていくんですが、そのうちに大野力さん(評論家)が入ってきて営業部長になった。大野さんは経理に明るいから、ゆっくりと立て直していくんですよ(210-1)。

……そうか、ベ平連ですね。

高畠さんがベ平連をつくるんだけど、運動は1966年、67年、68年と大きな波になるでしょう。高畠さんや私の予想を超えて、どんどん広がっていった。いつのまにか『思想の科学』はベ平連の後ろにある雑誌と思われ、ベ平連からくる書き手が共産党の悪口を書く。それは私の本意じゃあないんです。(中略)京都で、作田啓一さんに呼びだされることもあった。(中略)作田さんは私(鶴見)に、「この雑誌はつまらないし、意味がない」といった。(中略)作田さんから見ると、ベ平連が広がり『思想の科学』が売れたこの黒字

戦後思想史において『思想の科学』とは何であったのか

時代というのは、すごく嫌だったんです。「石の墓に矢を射るようだ」といった。売れた時代は中味はよくなかった。そのことは私もわかっていました。結局、人生は二河白道。売れてもよくない。売れなくてもよくないんだ(211-2)。

中央公論社からの『思想の科学』の第1巻を読んでいましたら、桑原武夫さんが「研究者と実践者」という論文を書いていました。(中略)この文章は1959年に書かれたものですが、桑原さんは、1970年以降の『思想の科学』をどう見ていたのでしょうか。

桑原さんはベ平連そのものをサポートしていましたからね。桑原さんは物事を大づかみにつかむでしょ。「正しさ」だけでなく、「実現可能かどうか」を見て、ベ平連の目標は実現可能だと思っていたのです。(中略)。

桑原さんは、国家の力によらなければ日本の重大なことは結局はできない。しかし国家の力に全部任せるようなことがあったら、日本は終りであるという考えなんです。なぜなら日本人は大したことがない。個人がしっかりしていないからだ。すぐれた仕事というものは、本来は国立大学などとはまったくちがうところからしか出てこない。しかし日本にはそういう場所がないのだから、学問は大したものにならない。桑原さんは、そういうふうには屈折して考えていた。(中略) 福沢諭吉とはずいぶんちがうと思いますね。福沢諭吉は、民衆がしっかりしてはじめて国家という自信と希望があるという考えなんだが、桑原さんは国家に頼らなければいまの日本では何もできない、そうである以上、結局、大したことはできないと考えていた。

桑原さんは対馬忠行(思想家)が自殺したとき、「対馬忠行の死に涙をこぼさないものは、学者のはしくれではない」といった。私(鶴見)はびっくりしましたね。いまでも鮮やかに覚えていますよ。対馬忠行は、戦後は反スターリン主義の先頭になりがんばったでしょう。トロツキーの研究をガリ版で出したりしていた。細君が亡くなり自分は老人施設に入ったんですが、最後

は希望を失い瀬戸内海に飛びこんだ。どう考えても、反権力としてさえ功なり名遂げたとはいいいがたいですね。しかしオリジナリティーをもっていた。それに対する惻隱の情を桑原さんは持っていたんです。私が桑原さんに感心するのはそういうところなんです。よく目の届く人ですよ (214-7)。

鶴見さんはベ平連と「思想の科学」とのあいだの種差を意識されましたか。

種差といわれるとすごくつらいですね。私にこの言葉を教えてくれたのは都留さんでしょ。ラテン語でいうと「ディファレンシア・スペシフィカ」。都留さんはラテン語をちゃんとやっているんです。私の中の「ディファレンシア・スペシフィカ」は、なかなか立てにくいんですよ。

私個人にとって、ヴェトナム反戦は不合理なものから出てきますね。私を育ててくれたアメリカが、ヴェトナム戦争というんでもないことをはじめた。アメリカの戦争に対する怒りが私に乗り移ってきて、ヴェトナム戦争に反対したいわけです。自分の内部に燃える火があるんですよ。でも『思想の科学』の場合は、燃える火があって始めたわけじゃなく、なんとなくはじめ、やっているうちにスキャンダルをつくられて、やけくそになってやる気が生じて50年がたった。

自分が一種の独裁者のような位置に立つのはよくないという感じは強くありますね。23歳のときはいいんですけど、73歳になったら後ろにひいていかなければならない。自分をずっと抜きたい欲望ですね。それがいま、自分を抜きえたところじゃないかな (217-8)。

IV おわりに

鶴見の『期待と回想』(下巻)(鶴見, 1997)の「あとがき」は、「自己批評—あとがきにかえて」と題されていて、雑誌『中央公論』深沢七郎「風流夢譚」事件にからむ『思想の科学』(中央公論社刊)「天皇制特集号」の社内自主規制

戦後思想史において『思想の科学』とは何であったのか

による断裁につながって鶴見をまきこむことになった事件を回想している。

鶴見によれば、中央公論社社長嶋中鵬二は小学校入学以来の友人であった。どうすればよかったのかの対策を、1960年秋、鶴見がもちえなかったということが37年たって嶋中鵬二の死をむかえた今、鶴見の中にあるという。この小説が社に來たとき、資金をつくり、深沢七郎に匿名で小冊子として少数数印刷頒布するようにすすめることができたと思う、と回想している。

それは永井荷風が、大胆な性描写をふくむ『四畳半襖の下張り』を匿名で世に送り、その原作者であることにしらをきりとおした生き方に通じる。荷風への傾倒ににもかかわらず、嶋中がその道をひらかなかつたのは残念だ。そこに日本の知識人が共有する甘えがかもしだされる。そのわなに落ちた、と鶴見は痛苦を込めて「自己批評」する（鶴見 1997, 238-40）。率直に言って筆者は驚いた。

『思想の科学』の終刊が1972年、鶴見俊輔の没年が2015年、時の経つのは早いものであると実感する。『思想の科学』は輝いていた、と言っても過言ではないと思っているが、それにしては論じていることが貧しく、低水準で、恥ずかしく思う。抜け落ちていることが多数あり、十分論じ尽くしたとはとても言えない。他日を期したいと思っている。

参考文献

佐藤忠男（1978）、『小津安二郎の芸術』上、朝日新聞社。

———（1979）、———下、———。

———（1986）、『黒沢明の世界』、朝日新聞社。

鶴見俊輔（1997）、『期待と回想』（下巻）、晶文社。

鶴見俊輔・上野千鶴子・小熊英二（2004）、『戦争が遺したもの：鶴見俊輔に戦後世代が聞く』、新潮社。

真木悠介（1977）、『気流の鳴る音：交響するコミュニケーション』、筑摩書房。

ラッセル、バートランド（市井三郎訳）（1959）、『西洋哲学史』1～4、みすず書房。